

京都遠征記

(雜報)

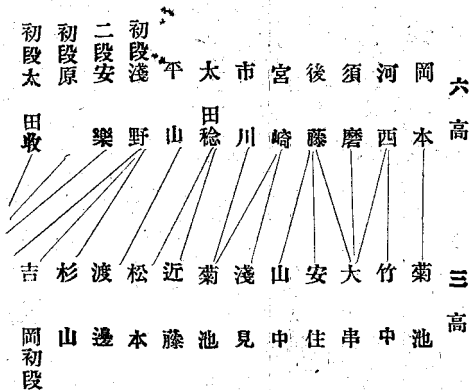
明治四十五年一月三日新春の彩雲變遷として銀杏城頭の高臺を包める朝、茲に柔道劍道の戰士三十名遠征の準備全くなりて梅崎、神江兩師範引率の下に必勝を期して京洛遠征の途に就く。午前十一時上熊本驛にて松浦校長、白壁柔道部長、江部劍道部長及校友有志の盛なる見送りを受け萬歲聲裡に汽車は黒煙を残して東に走る。驛々に此行を壯にする學友は「しつかりやれ」と激勵を與ふ、戰士の顔には既に決心の色漂へるを見る。海峽の夜は風いたく冷かにして、黎明の中國の景致は白霜に綴られて、緊縮せる感知、何となく戰士の胸に適合せるを覺ゆ。長途の車中の困難も四日午後三時には洛陽の人となりて全く忘れ鐵腕の熱血高鳴して氣大に昇る。京都驛には京大本島文一、東大兒玉勳夫、全上野恒夫諸兄の先輩と三高委員との來迎を受けて、柔劍各々分れて所定の宿につく。

柔道戰記

六十四

(一) 三高對六高戰陪觀

一月六日——此日吾が五高劍道と三高劍道と武徳殿に於て戰鬪を開く、之と同時に三高道場にては三高對六高の柔道試合あり、三、六共に明日及明後日の勁敵なれば其戰況の一般を知り置くも一興ならむ。即ち左の結果を以て三高は萬斛の恨を呑んで六高遠征軍のために破らる。



初段杉 山 堀 初段
 ○(副將)二段妹 尾 森 初段(副將)
 (大將)二段安 達 澤 田三段(大將)

(二) 六高對五高戰

一月七日 起き出づれば一夜紛々天より降り、京洛の天地は白雪體々、巒嶂連山玉瑤を彫めて今日の戰鬪の脊景を美しく飾れるに非ずや。あゝ雪！義徒の壯烈、櫻田門外の血、皆それ雪を得て一層の光彩を放てるものと謂ふべし。今日は昨日三高を敗りて意氣大に昇れる六高軍と吾が龍南軍との決戦日也。三高道場にて午後一時五十分より開始す、窓外六花紛亂せるありて天日ために薄暗く、場内肅殺の氣漲りて觀衆片唾を呑んで形勢を見る。

審判規定 一、大將、副將二十分間。有段者に對しては十二分間。其他は十分間引分けの事

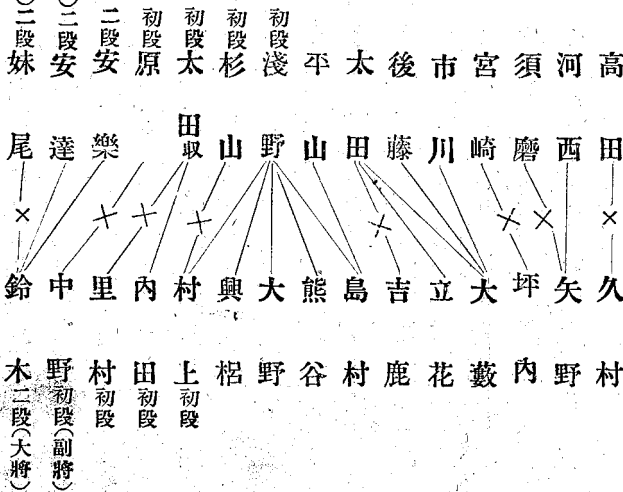
一、手頭足頭以外の逆業を無段者にも許す事。

審判官 磯貝先生 (前半) 永岡先生 (後半)

高田——久村。劈頭の一勝一敗は實に全軍の士氣試闕す、一步は一呼に應じ、先づ紅面の高田大外をにみ續いて吾が久村巴に行きて組業に出づ、高田立

つて再び大外刈を爲せごも効無く、久村幾度か組に出でんとして戰雲漸く暗澹を極む(七分鈴)久村後占

六高(紅) 五高(白)



めに行き兩士轉々からみ合ひて將に敵を睨目せしめんとして高田漸く免れしも「業有」を宣告せられ、久

村茲に奮勵一番敵を促して激烈に攻撃に出でしも高田よく防禦につとめて時の至るを俟つ、十分ベルは響きぬ、引分は宣せられぬ。あゝ斯の如くにして初戦は勝敗の前途を茫漠たらしめけり。

河西——矢野。敵の河西先づ巴を發して矢野の体の崩るゝを押込まんとす、矢野巧に逃れて機の熟するを俟ち自重して未だ一技をも出さず、敵右大外を思切つて出し、矢野の体危かりしも、大外は矢野の特意とするところ、よく防戦す、既にして第一鈴鳴るや敵も今度こそはと一氣に大外に出でしを、矢野巧に受け外して茲ぞ機到れりと爲し、押込に行くよと見せて後占めに敵を瞋目せしむ。吾が軍の士氣爲に大に揚る。

須磨——矢野。敵の須磨戦友の死を見て目醒しく戦ふかと思見るに袖を握らしめずまたとらずして空しく時を費す、稀に相方足拂を試むる位にて活躍の見る可きなし。矢野も前戦に少しく勞れたれば冒險を敢てせず引分け。

宮崎——坪内。坪内先づ巴を決行せしも効を奏せず直に押込まんとして苦戦苦闘を爲す、敵の宮崎よ

く頑張りて應戦大に努め上になり下になり、右に倒れ左に轉み、押し合ひ揉み合ひ、更に横じ合ひ、遂に上と下とより占め合ひとなり、戦はいよいよ慘烈を極む。第一鈴後、立つて渡り合ひしも直に崩れて揉み合ひ、へし合ひ遂に勝敗の決を見るに至らず他日を約して馬首を東西にかへす。

市川——大藪。吾が大藪右跳ね腰を試みて成功せざるを見るや、眞捨身巴を決行して市川空しく一と伎をも出さずして落命、此間僅に一分。

後藤——大藪。後藤は昨日三高戦に於てよく奮戦せしもの、味方の不利なるを見て決心の色あり、大藪先づ右の内股にて「伎有」をとり其まゝ押へ込みに行かんとして成らず、其に帯をとり、敵は左跳腰に大藪は右跳腰に其優劣を争ふ。かくして戦ふ事四分餘、敵が大腰に攻め来るを大藪得たりと後腰に抱きあげ目~~黒~~どころよりキユツといふ程投げ落ししは鮮かなるものなりき。

太田——大藪。敵の太田戦場の慘澹たる光景を見て心中大に決するところありけん、初めより寢て組業に行かんとす、大藪のかけし投げを巧に受け流し

て送襟後占めにて大藪勝を敵に譲る。

太田——立花。敵の太田初めより寝て組業を所望するものゝ如し、立花立つても寝てもよく奮戦し、大外、脊負投を連發して攻勢に出でしも老練なる太田よく受け流して機を見るもの、如し、果然立花が大外に出でんと奮進し來るを見て其裏を拂ふや小外見事にきまりて茲に白軍二度太田に勝を譲る。

大田——吉鹿。さきに矢野、大藪によりて大差を生せるに今や老練なる太田一人によりて大勢を挽回せられんとす、吉鹿奮然として色をなして出づるや、太田又もや初めより寝て戦を挑む、立ち上るや吉鹿忽ち巴を決行、あはやと見る間に敵も巧者もの、善く体をかはして急を逃る、飽まで老獪なる敵は之よりして左袖を執らしめず、吉鹿あせれども如何ともする事能はず、遂に敵の注文通りに分引となりしこそ返す／＼も口惜しけれ。

平山——島村。島村先づ内股を以て攻むれば敵の平山吾れ劣らじと同じく内股にて應戦す、忽ち島村が試みし巴に「業有」を得られし平山は、連發肉迫せし島村の内股を返へして前の業を消す、共に攻守交

々相つとめ颯風沙礫を捲くが如く奔流岩角に碎くるが如し、平山茲に機を見てかけし内股を島村外づして後占めに上を下へと粗み伏して苦闘せしも得るところ無く、共に立つて一呼吸を入るゝや島村巴に出でず平山内股に應へて奏せず、第一鈴は戦期の末後に近けるを報す。平山こゝを最後と出せし内股美事にきまるよと見しに老練なる島村よく之を返へし飛鳥の如く後占めをなして追の勇士平山も百戦効無く空しく落命。

淺野——島村。有段者の先陣として敵は淺野悠々として馬を進めて戦場に馳せ參せり。淺野は昨日の三高戦に於て偉勳を擅にせしもの、其進退悠々迫らざる處に老練を見る可し。島村奮戦勉めしも頗戦の苦闘にて意の如くならず、淺野が左跳腰に業を得られ續いて全業に刀折れ矢つきて無念の涙を呑んで陣を退く。

淺野——熊谷。熊谷满面朱を注ぎて袖をとるや足拂を連發して成らず、淺野左疎腰に出で、之も効無く、熊谷又もや足拂ひにて續けざまに押しよするを機を見るに敏なる淺野は甘く之を利して緊四方に押

込む、あゝ二度敵に勝を譲る。

淺野——大野。白軍大野味方の大勢を見ては豈涙無からんや、其勢ひや隼鷹の蒼空を搏つにも似て先づ跳腰を以て攻め立つれば、淺野も左跳腰を以て防ぎ、彼打てば此邀へ此れ進めば彼れ止り、戰雲漸く亂れて醒風縦横、大野躍氣となりて跳腰をかくれば淺野の体危く見わしが自若たる淺野堅く守つて陣を亂さず、大野續いて大腰に行き返されて業を取らるゝや飽まで攻勢と探りて揉み合ふ。忽然として電光の如く放ちし跳腰の仇なれや返されて合せて一本。あゝ力戰効無く三度敵をして名を爲さしむ。

淺野——興梶。共に容易に袖を採り合はず暫時は睨み合ひの姿也。興梶跳腰を以て攻め立つれば追の淺野も腰引いて防戦を事とす。之より先き興梶は練習中肩骨を脱して以來治療大に勉め稽古を休みて漸く今日押して戦場に出でしものなるが、遂に得意の業を出しても決まらず、再び肩をいためて如何ともする事を得ず連發せし跳巻を返されて四度彼をして名を成さしむ君が無念や如何計りなりけむ。

村上——淺野。吾が白軍は累々たる味方の死屍を

踏み越わて有段者の先頭村上現はれたり、躰て二禮終るや村上内股を連發して一氣に淺野に肉迫す、淺野も連戰よく戦場に馴れて巧に逃る、あなもののもの振舞哉と村上巴を試むれども成らず、淺野徒らに勞を惜むと雖機至れりと爲し押込みに來る、村上難無くはね起きしが又々組みに來る、茲に暫く粗みつ、もつれつ、立つて利あらずと見し淺野は容易に立たず、村上巧に敵を組み伏せしも空しく解けて敵また立たず息を入る。村上氣もいら／＼七分を費して得る處なく眉宇昂然として怒氣場を壓す。即ち孟賁の勇を奮ひて時もあらせず攻め立つれば淺野事やありけむ、肩を痛め乍らも寢業に行きて雄々しく戦ふ、忽ち腕しきを以て茲に戦場の勇將淺野破らるゝと彼や敵乍らも善く戦ひたり、業に秀抜の点あるを見受けずと雖も、從容として迫らず敵の機を見るに敏、**昨日**昨今拔群の偉勳を立てし所以にして又善く其名を擡にする事を得たる所以なり、今破るゝとも百戰よく力めたり好漢それ自愛せよ。

杉山——村上。杉山は甘餘貫の大男を以て聞ゆ村上足拂ひ、内股を交々連發して攻め寄すれば仁王の

如き杉山體力と剛力とを以て組み伏せんとす、村上巧に逃げて防げばさしもの杉山も空手徒らに術無く立てば村上息つく隙もなく内股大外にてつめ寄す大外見事かゝりて脆く倒るれども杉山もさるもの決して上体を落さず。杉山憤然左内股を發せしに村上受け損じて「業」をとられ一技一呼に應じて飛泉奔瀨巖峽を劈くが如く、又もや幾度の大外にて大兵を尻餅つかせ、内股に浮かし、視る者をして手に汗を握らしめしも象の如き杉山の体見苦しく横はる可きかは、村上巴に出でしを利して杉山押込みに行きしもならず、彼攻むれば此守り進んでは奔馬の如く、退いては泰山の如く、村上内股を以てすれば杉山腕敷に來り第一リンなり第二リンなるも遂に雌雄を決する能はず他日を約して太刀を收め馬首を東西に返へして退陣す。

太田——内田。鐵腕無雙の内田、老巧機を見るに敏なる太田と袖を執るや、狂風の大地を一掃するが如く巴と跳腰とを以て攻め立つれば太田も施すべき術無く、只巧に危機を逃れて防戦之れ力む、内田あな物々しき事よと組業に出でんと思ひ寢て戦を挑め

ば、太田は寢業は吾も欲するところなりとて体を躍らして袈裟固めに來るを内田逃げ損じ見事に押込み決まりて鮮かなる勝は紅軍に歸しぬ。

太田——里村。多大の期待を以て出陣せし前戦友の空しく破らるゝや、白軍の里村鐵鞭を高く掲げ悵恨深く胸に湧きて陣頭に立つ、あゝ形勢なんぞ非なる。然れども敵は里村の投業に秀でたるを見るや、寢業、押込、足搦に來る、里村立てども太田蛇の如く巻きつき、一方は立たんとし、一方は寢ねんとし、里村味方を省みて氣のみはやれども遂に一技の施すべく無く切齒すれども甲斐無く引分けとなる。

原——中野。吾が白軍は副將中野遂に出馬の止む無きに至る。敵は二段二人を残せり中野の任や重し。中野組業を以て攻むれば原防戦逃るゝ事に之れ力む中野十度組みかゝれば原十度逃げ、中野肥満の体に力を罩めて行けば、原長大の脛にて頑張る、中野は原をして組ましめ巧に返して上四方に行きしが時なる哉處なる哉狭き道場の事なれば原壁に長脛を突張りて力めば道の中野の組も解けて機を逸し天に向て長大息、十五分の第一リンに中野の眉宇上り立業に

行くも原決して業を出さず。あゝ斯くの如くにして規定の二十分を過ぎ、中野兩腕を省み涙を呑みて引分く。

安樂——鈴木。敵は三將二段安樂吾が大将鈴木に向つて肉迫しぬ、龍頭蛇尾に終らんとする我が軍の運一に大将一人にかゝれり、見るもの吾が軍のために危む鈴木忽ち巴を以て「業有」を得、續いて上四方に行けば、安樂脆くも組み敷かれて落命、此間七分を費す。

安達——鈴木。敵は副將安達四蹄風を生じて猛奔するが如く、風姿颯爽追は昨日の對三高戦にて大将たりしもの、疾風の如き小内刈を以て業を得られたる鈴木電光の如く小軀を躍らして組み伏せんとすれば、安達巧に逃げ、再び組まんとし再び逃げ、三度中空を中轉して上四方に行き、美事に敵をたほし、茲に敵も大将殊尾駿馬に鞭打つて拍手の中に出陣す。

妹尾——鈴木。敵は昨日三高の大将澤田を破りたる妹尾、味方は軍の興廢を一身に荷へるもの共に暫くは袖を執らず、之れ疾風の至らんとして天地寂なるの状乎、既にして鈴木組に行かんとし、敵の体上

を中轉して上四方に組みつきしも可惜一段高き狭まき道場の事なれば「階段」のために之を逸し、真中に出でゝ又組みにかゝる靜に機を見たる妹尾電光の如く飛び入りてかけし左内股に鈴木体を翻して之を避けしも業を得らる、鈴木あなものくしき振舞哉と攻め寄せ、つめ寄せ、押へんとしては逃し、組まんとしては逸し、飛鳥の如く身を躍らす花々しき活動振には追の剛敵妹尾も守勢をとりて防戦に之れ力むるのみ、鈴木機至れりとなし押込みに飛入りしも「段」のために再び之を逸し、十五分リンは響き鈴木は昂然として勝負を急ぐ、妹尾は靜に疊に伏して輕舉に出でず、暮色は蒼然として迫り、遂に兩雄は雌雄を決する事能はずして茲に稀有の盛觀を以て戦を終る。

あゝ中原の鹿は彼も吾も遂に獲る事能はずして兩軍勝敗を後日に殘し、旌旗を卷いて幕營に向へば、雪の三十六峰は夢の如くに暮れて加茂河原の逝水潺々幾多古今戰鬪の歴史を語る、戰士の感慨胸底に充ちて一語不語。

(三) 三高對五高戰

一月八日——午前十時四十五分より三高道場に於て三高軍と吾が龍南軍と雪の背景の中に決戦を爲す
審判規定、一、大将二十分間、有段者十二分間。其他は十分

間引分けの事

一、無段者同士、又は有段者が無段者に對しては逆を許さざる事。

審判官

永岡先生 (前半)
磯貝先生 (後半)

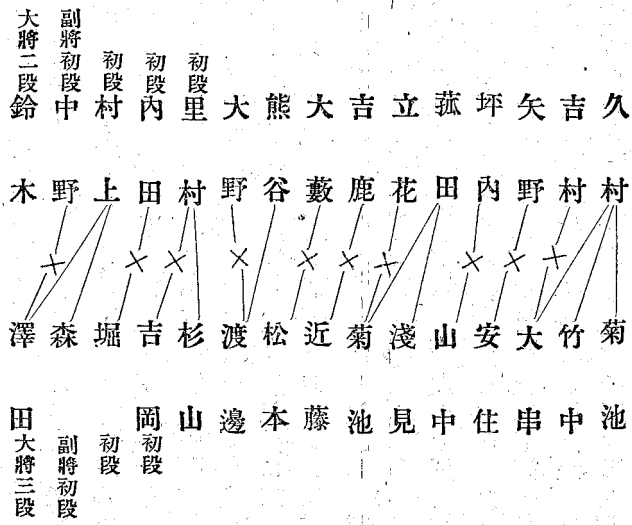
久村——菊池。久村先づ巴を施して敵の体を崩し組まんとす再び菊池苦心慘澹漸く逃れて立ち上やる久村は大外刈に菊池は内股に交々秘術を盡す、三度久村は組みに行き(第一リン)袈裟固めに甘く成功す。

久村——竹中。久村押込まんとすれば竹中善く逃げ廻る、久村幾度か組まんとし「段」のために惜しい處を逃しぬ、竹中押込みの心得あらば幾度か好機を有し乍ら(第一リン)反つて久村のために機を制せられ上四方にて詭くも破らる。

久村——大串。三高軍劈頭より旗色甚だよろしからず、大串即ち久村の勞れたるに乗じて押込みに來る久村巧に逃げしも最後の上方のために遂に敗北

五高(紅)

三高(白)



の止む無きに至りぬ。

吉村——大串。昨日の對六高戦にて吾が島村、興梶の二人負傷のため本日對三高戦に出づる能はず補欠を劍道に求めて吉村、菰田の二氏を得たり。

共に固くどりて動かず、吉村巴を施して攻むれば大串之を利して押込まんとす、吉村は大串の足拂ひに來るを利して足を拂ひ大串爲めに危し。兩氏其進むや疾風の如く其退くや泰山の如し、敵右大外に出づれば味方は左大外に激戰數十合にして引分く。

矢野——安住。共に暫くは片袖を執りて引き廻るのみ、安住が巴に來るを利用して矢野押込まんとし揉み台ふ、立つて戰へども遂に勝負決せず引分。

坪内——山中。坪内初めより押込みにて戰ふ。幾度か引張り込まんとしては之を逸し、山中防戰百方之れ力むるのみ轉々として上になり下になり、組みつ組まれつ共に健闘せしも遂に引分。

菰田——淺見。補欠として出でし菰田小兵なれども進退開合の呼吸に於ては遠に龍南劍道界の明星、菰田劈頭巴をかけて成らず組まれんとせしも、巧に逃げ、小軀を躍らして大兵の淺見に脊負を施して無効に歸するや息つくひまも無く次で巴を決行して「業有」を得、淺見之に乗じて押わんとせしも立直り様菰田の巴見事きまりて敵の体を場の真中にどろく計りに投げ出す。

菰田——菊池。菰田が小兵なるに引かへ菊池は今日の戰士中一際目立つての大兵にて菊池馬力を以て菰田をブリ廻はせしも菰田よくこらへて幾度か巴を以て敵を艱ます、菊池機を得て押込上四方に來るや菰田力闘効無く戰場の露と消ゆ。

立花——菊池。菊池度々大外に來る、立花又内股にて之に當る(第一リン)菊池馬力を悼みて押込みに來れば立花老練一進一退も忽にせず共に秘術を盡しども兩士の力や互角なりけむ引分の宣告の下に戎衣の袖を分つて東と西とに。

吉鹿——近藤。共に新進の新手、近藤巴に來るを吉鹿何んのと身動きもせず却て之を押へんとす、近藤再び巴に出づれば吉鹿も同じく巴を決行して忽ち「業有」を得、其まゝに押込みて美事に決まらんとせしが危いところにて可惜之を逸し、之より近藤片袖を執らしめず、(第一リン)吉鹿何糞つと身を躍らして押込みに行かんとするを近藤兩足を以て蹴のけ、跳ねのけする様は石火飛んで四散するが如かりけん後にて「花火線光」の如かりきなどの風評ありしとなん。吉鹿度々巴に出でんとすれども敵の防戰堅固

審判官の引分けの聲に惜くも劍を歛めて陣を退く。

大藪——松本。大藪巴投に攻む松本体を翻して之をよけ、松本右大外、内股に來るを大藪軽く受け流し大藪得意の内股と巴とを以て交々攻め立つれば（第一リン）大藪は松本が死力を盡して内股に來るを外づして押込まんとせしも、敵巧に跳ね除け、立直りて共に力戦十數合の後（第二リン）引分け。

熊谷——渡邊。渡邊左大外に來るを熊谷よくかはし乍ら得意の右足拂を連發して敵に肉迫せしも、敵もさるもの而かも左きくの剛者なれば、熊谷が一氣につめ寄する右足拂ひを利用して渡邊は巧に左釣込みに出で首を敵の手に委す。

大野——渡邊。實にや勝敗は兵家の常とはいへ紅軍の前軍が勝ち續けたるに中軍の振はざるため敵のためにあたら形勢を恢復せらるゝ事の無念ならずや大野戰友の屍を踏んで陣頭に立つ、大野大腰に寄り立つれば渡邊巧に外して押込みに來る、立つて大野右足拂を連發すれば敵は左大外に之を利せんとし（二人段より落つ）大野一氣に大腰に攻め立つ（第一リン）大野天馬奔放の勢を以て敵を場の隅机の下に

押しつけて大奮戦をなせしも遂に天機至らず、兩雄の奮闘見るから心地よかりしも遂に決戦を他日に約して馬首を返へす。

あゝ大勢互角對等の形勢を示せり兩軍氣色ばみて肉墨血濠の慘景は正に之より演せられんとす。

里村——杉山。里村莞爾として杉山に渡り合ふや一分を出でずして大外刈にて見事杉山を葬りし事際立つて鮮かなりき。

里村——吉岡。吉岡前車の覆るを見て左袖をこらせずして頑強に抵抗す、里村大外にて「業有」を得攻勢甚だ元氣よく跳卷込にて、敵を惱ます、吉岡押込、左大外を試みしも里村軽く受けて左袖を執らんと焦れば吉岡茲大事と死力を盡して執らしめず（第一リン）里村焦心措く能はず足拂、大外を連發して吉岡の心膽を寒からしめしも敵の防禦堅にして引分内田——堀。内田、堀の襟を握るや締めにかゝる漸くにして堀之に堪へ、立つや堀身を躍らして背負投を施す、内田泰山の如く動かすして右大外、左跳腰を爲すも堀身を轉じて之を除け。彼機あらば脊負はんとし此機あらば跳腰を試みんとし、堀後締めにか

来る、内田巴をかけたしに堀巧に身をかはし組みとなり、解く(第一リン)内田躍起となり頸占めに渾身の力を雙腕に罩めしも遂に之を逸し組みに行かんとして引分の宣告。

村上——森。敵は副將森陣頭に駒を進めて大勢を挽回せばやと渡り合ふ、村上袖を執るや否や電光石火も管ならず内股を見舞へば森の体宙を飛んで落ちたりける此間僅に二秒。

村上——澤田。「あな云ひ甲斐なき味方の働き振り哉」と白軍の大將澤田三段安危を一身に荷うて幕營を出で、戰場に現はる、剛壯なる顔面孤軍万里單騎回天の色あり、澤田霹靂一聲「ヤア」と大外に来る、村上巧に逃ぐるを、澤田是が非にも幾度か猛烈なる右大外に来る。村上得意の内股巴に應戦すれども快力の澤田動くべきかは。澤田大外に来るを村上巧に外して後締めに攻むれども逸して立ち上るや。澤田色をなして敵の体微塵にもなれどかけし大外に村上の体碎くるよと見わて「業有」を得、其怪腕の金剛力の恐ろしかりける事よ。次に又もや大外を決行するや村上の体たつきつけられて此間八分紅軍副將中野

肥馬に鐵鞭をあて、悲愴なる戰場に駒を馳驅す。

中野——澤田。中野澤田を引張り込んで澤田に押込ましめ返へして敵を押へんとせしも逃げられ、立上るや中野寢業を挑む、澤田押込みに来る十數度、其度毎にこち起きて戦雲漸く暗澹を極む。白軍死力を盡して戦はずんばそれ之を奈何せん。澤田進んで敵の肉を啖ひて此熱腸を冷さずんばある可らずと兩眼に血を走らせて攻め寄すれば、此方は中野「吾軍大將を出すに至りては何の辭ありてか龍南の友に見へん」と右手に突張り左手を休ませたり、澤田巴、大外に茲を先途と戦へば、中野は飽まで寢業に出づ、實に一進一退、開合離聚、生龍の雲を呼び猛虎の森林に嘯くが如く。立つては颶風砂礫を捲くの勢あり、寢ては奔流急潭に渦巻ぐに似て激闘數十合、眞に天下の偉觀を呈しぬ。時は移りて二十分間を費しぬ、白軍の將澤田眞によく奮闘せしも大勢既に如何ともす可らず、大体に於て敵はかゝる名將を有し乍ら副將以下殆ど皆攻勢に出でずして防禦を之れ事としたるは敵乍ら三高軍のために大に惜む處にして、澤田の目覺しき奮闘も遂に効無く相方陣を徹す。

吾軍の大鈴將木後陣にあり劍を撫し、采配に倚つて微笑を漏す。

比叡嵐しの風一陣飛雪を交へて吹き來れば阿鼻喚叫の阿修羅の巷は俄に靜寂に歸りて龍南軍の凱歌三度遠く西海の空に向ひはむかし。(吉鹿生記)

遠征の事一度東都に傳るや前柔道部委員兒玉勳夫君上野恒夫君は短時日の間に百方軍資の募集に勉められ東大より遙に應援のため下向せられたるを多とするものにして京大の本島文一君は始終旅宿其他につき幹旋の勞をとらる、又二高の西原君も記者等中學時代よりの友にして激勵せられたる事多大共に茲に感謝す。

東京帝大五高出身者寄附金如左

一金壹圓	法學士釜瀨 富太君	一金壹圓	加瀬丈兵衛君
一金五十錢	池田庄五郎君	全	高妻 直道君
全	笠原 敬輔君	全	草野 義一君
全	大内 兵衛君	全	上野眞二郎君
全	井手 義知君	全	岡 部 常君
全	小村源三郎君	全	森 信君
全	佐々木不愠君	全	大津留 聰君

雜報

全	中村 寬猛君	全	福田 慶三君
全	兒玉 魯一君	全	兒玉 勳夫君
全	守田良太郎君	全	石田 和吉君
全	江上 綠助君	全	上野 恒夫君
全	宇部宮一磨君	全	矢野純太郎君
全	岡崎 泰助君	全	三浦 七郎君
全	坂田 昌亮君	全	田原 鎮雄君
全	河村 包亮君	全	富澤保太郎君
全	佐野 隆益君	全	山下 均君
全	河田 茂君	一金三十錢	越川 道三君
全	殖田 俊吉君	一金二十錢	小川藤次郎君
合計金拾八圓參拾錢也			

劍道戰記 (對三高戰)

羽檄幾度か飛んで四十四年の歳末は行雲甚だ急なるものあり、選手の姓名發表せられ、談判熟して數ヶ條の規約交換あり、其内一學期試験は終了し一週間の合宿練習の中に乾坤は一轉して世は新酒に酔ふの日となりぬ、雨を冒して龍田山上の元旦を送りしかと思へば三日は早や遠征の途につく。

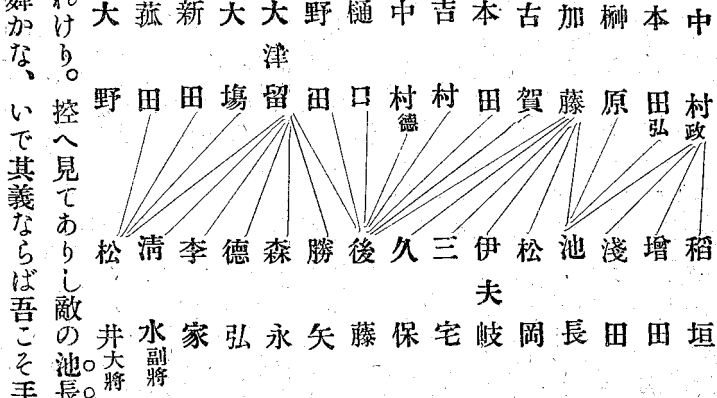
一月六日午後一時兩校選手記念撮影の後武德殿に

入る。實にや初めて上洛したるものは京を見て初めて痛切に日本歴史を偲び、武徳殿を仰いで茲に日本武道を看るとかや。殿内前面の高壇には斯道の名家着席せられ、一般席には觀客星の如し。あゝ晴れの舞臺、戰士の雙腕には熱血音をなして流るゝに非ずや。

去程に吾が軍の先鋒として手綱かいぐり中村こそは乗出しけれ、其身には纈纈の鎧直垂に精好の大口を張らせ紫下濃の鎧に白星の五枚甲を猪頸に着なし黒き逞ましき駿馬に鹽干瀉の捨小舟を金具に磨りたる鞍をぞ置きたりける。敵は如何にと見てあれば、かなたの陣幕さつと押しわけ紺の唐綾威の鎧に白母衣懸けて鹿毛なる馬に乗りたる武者戰場へぞ急ぎける、何者やらんと馬打ち寄せて是を見れば稻垣となん申す武夫なりけり。互に大音聲を揚げて云ひけるは、吾等は軍の先陣をかけて屍を戰場に曝さん事を存じて相向へるなりと。吾が中村の大刀風鋭くして稻垣早くも切つて落され續いて出で合ふ増田、淺田の面々固より討死せんと思ひ立ちたる事なれば、何かは一足も引くべき、命を限りに二人とも稻垣と一

審判官 三高師範 内藤先生
五高師範 梅崎先生

中高(紅) 三高(白)



所にて討たれけり。控へ見てありし敵の池長、あな悪つくき振舞かな、いで其義ならば吾こそ手柄の程

を見せんものをと、渡り合へば、道の中村もあはれ百戦矢つきて池長に首をぞ渡しける。吾が軍本田、柳原の荒武者を追手搦手に推寄せしめしも甲斐なく、智畧にたけたる若武者加藤尊正こそは馬上豊かに乗出しける、忽ちに敵の池長の首かつ斬り、並み居る敵の陣營に向つて云ひけるは、勝敗は兵家の常、苟も弓矢の道を學びたらん吾と思はん人々は出合ひ候へど、いふより早く來り會せし敵の松岡續いて伊夫岐。然れども加藤のためには物の數かは、三宅、久保、味方の様を省みては、今生の榮譽は今日を限りの命なれば祈る處にあらず、唯大悲の弘誓の誠あらば友にて候ふ者の討死仕り候ひし戰場の同じ昔の下に埋れて、九品安養の同臺に生るる身となさせ給へ、と祈りしや否やは知らねども、無殘にも加藤がために討たれける。茲に敵の中堅として實力大將にもたさく劣らざる後藤といひけるは其剛勇既に名あり、こゝ一番拔懸の功名して呉れんずるものをとて、かねて有増の事なれば其日の馬、物具、笠符に至るまであたり輝してぞ立たれける。花曇子の濃き紅に染めたる鎧直垂に紫絲の鎧金物繁く打ちたるを透間も

無く着下して白星の五枚甲の吹返に日光月光の二天子を金と銀とにて掘り透して打ちたるを着なし、金子作りの圓鞘の太刀に三尺六寸の太刀を帶き添へたる武者振りに、既に五人迄も斬りたてたる味方の加藤「いでや御參なれ死は元より覺悟の前、骨は化して黄壤一堆の下に朽ちぬれど名は留りて青雲九天の上にて聞わなばよし」かくして兩勇士激戦奮闘火花を散らして、あるは進みて電光の如く、あるは退きて泰山の如く、開合散聚めざましかりしが、あはれや加藤は後藤の新手の元氣に勢盡きて、敵のために討たれり。敵の後藤の太刀節鮮かにして、續いて味方より馳せ向ひし古賀斃され、本田破られ、吉村も亡びて氣鋭の中村徳之敗軍の兵を集めんと旗打ち立てて進みしが遂に効なく、旗を卷いてぞ退きける。之を眺めて居たりける味方の樋口後藤の矢表に立つに非ざれば弓矢取る身の差とは思へど、續いて出づる野田と共に比叡山下の露とこそは消ぬにけれ。

あゝ吾軍次第に利あらず、敵後藤一人の戰場に委するは九州男兒の本懐に非ず、實にや麒麟は角に肉ありて猛き形を顯さず、潜龍は三冬に蟄して一陽來復

の天を待つとかや、今や吾れ立つの時なりと龍南の猛將大津留耕吾黄瓦毛の馬の太く逞しきに三本唐笠を金具に磨りたる鞍を置き、厚総の鍬の燃え立つばかりなるを懸けたるが、あたり眩ばゆく光り渡りて、馬、物具の體、軍立の様、今日の大手の將軍は是なんめりと敵らぬ覺はなかりけり。七人までも首かい斬つたる後藤もあはれ此威風には向ふ太刀の自由ならず、茲を最後にぞ討死しける。大津留此處に開き

合ひ、彼處に攻め合ふ敵をば、鎧の袖に振り拂ひ、打物の達者なれば近づく敵を切つて落す、敵の勝矢を初めとして森永、徳弘、李家は力戦せし甲斐も無く、大津留が刀の錆と消え失せて一擧にして副將清水が壘に肉迫す、芥塵掠天、牙血地を糢糊す、其有様項羽が漢の三將を靡し、魯陽が日を三舎に返し戦ひしも、是には過ぎじとぞ見たりける。敵の副將清水よく奮闘力戦勉めしも大津留が余威に壓せられて遂に大將松井こそは駒を早めてぞ馳せ參じける。松井の名や既に天下に高し、吾が龍南軍彼あればこそ今度の戦を挑みけれ、彼の矢表に立たんがために遙々鎮西の果てより乗出したるなり。實にや松井は名將

にして懸抜け懸け入り交り合ひ、彼處に現れ、此處に隠れ、火を散らしてぞ戦ひける、其聚散離合の有様は須臾に變化して前にあるかと思すれば忽焉として後にあり。大津留の力戦も今や空しくして、一度彼に戦場の覇權を委するや、味方の大場も新田も松井のために威服せられぬ。

味方は茲に龍南の重鎮を以て目せらるゝ副將菰田正則を戰場へとぞ促しける。あゝこれ天下の好敵手と敵も味方も鳴りを静めて視てあれば、菰田が打ち下す太刀鮮かに面を斬りしが松井むつと計りに打ち入りし太刀先き菰田が小手を占めて耻を雪ぎぬ、あゝ此機此時再び松井が踏み込んで來る刹那、機先を制して打ち込みし菰田が太刀に敵の小手正しく切れて地上に落ちたり。

あゝ勝敗は兵家もよく之を期せず敵運拙くして軍神吾が龍南軍に幸すと雖も其壯烈なる奮闘の様は敵も味方も感せざるは無し。省みれば味方は菰田尙ほ餘力あり、大將大野無然として采配を按じて後陣に控へたり。

斯くの如くして嘗て一度も汚されざる吾が龍南劍

道史上に戦勝の一頁を附記する事を得たるは實に歴史其ものと温愛深き諸先生先輩並に一千の校友諸君の後援とに歸せざる可らず。(よし生)

終に東京帝大の五高出身先輩諸君より應援費を送られしを深く謝し、猶ほ合宿練習中見舞の辭と贈物を辱うせし左の諸君に厚く感謝す

大麻君、鶴田君、魚住君、鬼塚君、川原君、大久保君、渡邊君、庭球部選手諸君、

併せて京都にて 太田、森谷兩先輩の斡旋の勞を謝す。

野球實戦記

頼む、しつかりやれと校友諸兄の熱誠なる聲に京都遠征の門出に上りしは十二月二十三日午後四時夕日花やかに降り積む雪に映わて何んだか前途に一縷の光明横はれる如かりき路大牟田驛を過ぐ撰手森氏の母堂あり一同に種々寄贈されたり如才なき連中の内には毎度難有うの聲聞ゆるもをかし九州線の程は試験後の樂しさで遠征實現の嬉れしさ加ふるに歸省のため同車せる校友も多く快談笑聲の

内に過しぬ

藤山古谷兩兄に送られて山陽線車窓の人となりしは十二時に間もなかりき選手の意氣は盛んなりされど瘳猛なる練習の疲れと數日に渡る試験中の睡眠不足は現金主義なる浮世の例にもれず睡眠を要求して止まず不識の裡に百里の行程を過して早や藝備の境を走れり

瀬戸内海の風光は手に取る如く遠來の吾人を慰めんとすれど絶えず腦裡を往來して止まざるは策戰の計企なりき京都に近くにつれて撰手中嬉々たる一人ありそも誰ならむ、久し振に家庭の人となる當夜の氏が夢見は想像するに難からざるなり

京都に着きは二十四日夜の幕の閉ざりし頃なり當夜驛前の旅宿に宿り翌廿五日帝大寄宿舎に入る十二月二十六日

對四高仕合、午後一時三十分京大内藤小野二氏審判の下に行ふ北陸の重鎮四高は今春東都の本場を踏み斯界に存在を認められし豪の者好敵手來れど緊禪してよく戦へり

第一回 四高の先攻に初まりたるも三者無爲森劈

第一にヒットして出で高山の犠牲球に送られしも後續なく

第二回 一死者の後浅水左翼を襲ひて二壘を奪はんとせしが江口の強肩よくこれを二壘に刺す山根二壘にヒットせしも神田凡死して止む我軍代り一死の後平瀬四球を利せしも瀬川の二壘に呈せし絶好のライナーよく敵の捕ふる處となり平瀬も共にダブルプレーさる、

第三回 四高平凡我軍代り一死の後江口左翼に二壘打をなせしも後續振はず

第四回 一死の後山根強打二壘を突き將にオーバーして二壘打ならんとせしが長軀の山本シングルハンドにこれを得事なく神田三振す古賀、原は三振し平瀬小フライに死す

第五回 二死の後神尾遊撃を突き古賀これを捕へ一壘に投せしも低きに失し一舉二壘を得たり廣野再び遊撃を襲ふ古賀の投球高く爲めに神尾本壘に入る塚田Pゴロに死し代る瀬川三壘ゴロに死し徳富徳三壘を失せしめて出でしも後續なく一對〇となり四高軍意氣昂れり

第六回 千家左翼フライに死し浅水山根相次でヒットし神田の犠牲球に送られて三壘二壘に據り機を待てり藤岡一揮中堅を抜ぐよと見わしが敏捷の森倒れんとしてよくこれを捕へ事なくやつと安心四高軍打撃大いに振へり我軍代りしも尙なすなく原のヒットありしのみ

第七回 四高の三者凡死して退く平瀬左翼を襲へば瀬川三壘に緩ゴロを呈す藤岡二壘に平濱をソォースアウトせむとしてならず徳富小内野球を呈す千家これを捕へて一壘に投ず一壘これを失す平濱二壘より本壘を突き一壘手狼狽して捕手に投せしも捕手又これを失しこゝに同点となる此時四高軍より徳富一壘手の捕球を妨げしと物言ひを附け(敵の一壘手線上にあり徳富これと衝突せし故に)しも採用されざり

き江口一壘に死せしも瀬川生還す二者徒死して止む一對二我軍の士氣振ひラツキーセブンの聲空しからす

第八回 三者氣爲に退く我軍代り山本右翼にヒットし原捕手の失に古賀の犠牲球に送られ平瀬の三振を捕手失しソールベースとなる快漢瀬川ボックスに立

つ四高軍バンドを恐れ前に備ふ應援者皆手に汗して大ライナーを望む球は投せられて三度來りぬこの第三球と力みて振りしバットは見事音して敵の不意に出で左翼の頭上遙かに柵外に出ずために山本原平瀬生還す瀬川満面笑をたへて三壘にありしが不幸こゝに刺され徳富凡死して止む一對五

第九回 四高最後の奮闘をなさんと大いに力む一死の後神田四球に出で藤岡の犠牲球に送られ吉川の左翼ヒットに生還す神尾獯猛なる難球を遊撃に呈す古賀身を倒して美事手中に收めて止む遂に五十一對二にて大勝す

高		山本	賀瀬川	富口	打撃數	三十二						
高		森高	山原古平	瀬徳江	犠牲球	二五						
CF	P	2B	C	SS	1B	3B	RF	LF	失策	三振	四死球	(千)
CF	1B	SS	P	C	RF	LF	3B	2B	三振	四死球	(高)	一十
高		尾野	田家水根	岡岡川	打撃數	三十						
高		神廣塚	千淺山	神藤吉	犠牲球	三五						
CF	1B	SS	P	C	RF	LF	3B	2B	失策	三振	四死球	(高)
CF	1B	SS	P	C	RF	LF	3B	2B	三振	四死球	(高)	三三

十二月十八日

雜報

京陵三旬の練習も何の爲めぞこれなむ昨年の屈辱を雪がためなる今日しも七高と對戰の時至れり單に復讎戰のみには非ずこの勝敗は優勝權に關係するものなれば吾人の肉は躍り血は漲れり在京大同窓の應援も又切なりき午前十時三十分猪子不二門二氏の審判の下に七高の先攻を以て試合は開始せられたり

第一回 プレーと共に高山の投せし第一球中堅のヒットとなり續く二者振はず坂本出で、左翼にヒットし渡邊生還一点を收む高山山本四球或は死球に出でしもP.C.をして二壘一壘に名をなさしめぬ

第二回 兩軍振はず只六岡の四球に出でしと原古賀共に四球に出でし位にて皆フォースアウトせらる

第三回 宮本一壘直球に死し稻垣三振渡邊又中堅にヒットしたるも二壘に刺さる瀬川四球徳富三壘を突き瀬川にフォースアウトせられ江口三振せる間に徳富又一壘に刺さる

第四回 奥永山續いて四球に出でたるも坂本の三壘に送りしゴロ却て奥を三壘に刺す板倉凡死國見遊撃を突き古賀平瀬共に一壘本壘に悪球を投じたるにより永山坂本生還す此時國見三壘にあり六岡又遊撃を

襲へば古賀國見を刺さんとして本壘に悪球を投じ國見生還此回三点を加ふ我軍代りしも無爲四對〇

第五回 稻垣渡邊小フライに死し奥一壘線上に怪球を呈して出でしも坂本の遊撃ゴロに死す我軍古賀平

瀨死球に二壘一壘を得瀨川對四高戰の強打を以て人氣を負つて立ちしがPゴロを呈して古賀を三壘に刺す徳富又Pゴロに平瀨を三壘にフォースアウトす江

口二壘飛球を坂本失し瀨川生還森四球に出でフルベースとなる高山の二壘遊撃間のタイムリーヒット

に徳富江口生還三点を恢復し差一点となる強打者山本ボックスに現はる若し山本の好打にして高山を生

還せしめなば將に同点されば多大の望は山本に集中せられたりされど一揮當らず二揮飛ばす三振珠は捕

手の手中にあり嗚呼

第六回 相方共に無爲

第七回 宮本四球に出でしも後續なく我軍ラツキーセブンの時來れり緊揮奮闘の機は至れり一死の後徳

富遊撃を突いで二壘を奪ふ江口凡死森四球に出でしも高山二壘ゴロに死して止む

第八回 永山四球坂本中堅に大飛球を得られ板倉四

球國見三振二死なり宮本三壘に緩ゴロを呈す瀨川一

壘への投球左にそれたが此の間永山生還板倉本壘を

突く平瀨本壘に投せしも遅くホームインとなる宮本

又四球に出でしも稻垣凡死す此回二点を加へ六對三

となる、原一死の後三壘遊撃間にシングルし平瀨の

二壘越のヒットに三壘に送らる瀨川四球を利しノー

ルベースとなる二死の後なり怪打三人を生還せしむ

れば同点打者の任や大なり觀者又色めく徳富四球を

得原生還入壘の曙光見たり次で江口現はるされど

任や重なりけむ三振して退く六對四、

第九回 一死の後奥四球にて坂本の遊撃越のヒット

に三壘二壘に據る高山時に悪球を投じ奥生還し七對

四となる我軍代りしも三者皆凡死して萬事休す

SS	渡	高	山	打撃數	三十
3B	奥	邊	本	犠牲球	二
CF	永		倉	安全球	四
2B	坂		見	死四球	十
C	板		岡	三振	八
LF	國		本	(高)	
1B	六		垣	(高)	
RF	宮		稻		
P	稻				

高	山本	賀瀬川	富口	打撃數	二十七
五	森	高山	古平	犠牲球	四
CF	P	2B	C	安全球	十一
		SS	1B	死四球	十一
			3B	三振	四
			RF	ゴロ	二六
			LF	高	二六

校友諸兄が多大の應援も此恢復の一舉にありしならむ不幸この敗又謝するに辭なし只時の運地の利の我れにあらざりしものをと諸兄の寛度に訴へむのみ。この遠征の記を記すに當り特に寄贈を忝ふし又多大の援助を與へられし諸兄の芳名を記して感謝の辭に代ふ

- 判 治 君(京大) 森 氏宅
- 本島 文一君(同) 坂梨 繁雄氏
- 端 治 君(同) 古谷 實君
- 前谷 庫太郎君 藤山 一雄君
- 鈴木 醫學士 久保田 醫學士
- 大村 理學士 高山 氏宅

其他京大同窓諸兄

大村理學士は特に多忙の身にも係らず態々來熊撰手と合宿し獎勵最も盡力せられ遠征に供ひて上京斡旋

に努力せられたりこと々に附記して深謝す
又原源六君は補欠として同夜撰手と勞苦を共にして直接間接に援助せられしは多とする所なり。尙我三壘瀨川は大阪毎日新聞社より金メダルを送らる

弓術部報

◎進級者は次の如し

- 進三級 四級 篠田重恵
- 進四級 五級 興津 壯
- 全 六級 佐藤清熊
- 進五級 級外 町野 一
- 進六級 宇野行藏、谷川清水、植木良祐、永松陽一、則元宇太郎、大山興一郎、狩野一郎、志田正雄、横山鐵夫、工藤峻、橋川祐一、鶴作次、安藤昌三郎、遠藤正巳、伊藤逸、楠本幹夫、長尾恒介、龜田久熊、宇木甫、石崎操、後藤鹿太郎、待山義雄、横山進、加來素六、

○射初式 明治四十五年一月廿日午後一時半より射初式を舉行す來り會する者十四人、敢て盛會と云ふを得すと雖も而も何れも皆一騎當千之士にして、新年の武者振こそ見物なれ、遙か彼方を眺むれば中央に黄金の的右に左にころが

る、上には澄める空の色下には瀾濤溢るゝ熱血の色
 の的懸け連ねらる矢配りの儀式も嚴かに順序定まれば
 先づ喜多嶋老將陣頭に顯る續いて射出す矢の響き
 弓弦の音は松籟に和して活氣躍如たり端艇界の豪將
 佐藤第一番に赤を落し肥わたりける駒の上に突き立ち
 上り黒塗の弓を振り翳して名乗を揚げたる様勇まし
 なんと云ふばかりなし續いて新進の藤原、白的を
 落し温厚の顔に微笑を浮めて引き退く、奮然として
 立ち出でたる喜多嶋老將青的を落し、が不満足らし
 き顔して退き來り「金的を狙ひ候ひしに少し上りて
 青に中り候」と白狀するは無邪氣なり餘り早く落し
 ては興なしとて差し控へ居たる怪將江副今は是迄と
 や思ひけん黄金の的を射て落す、最後の止めを喜多
 島が黒的に差し案外早く五色の的は落されたり、
 次に餘興の源平に移る第一回の勝負にて各自の腕前
 を檢し第二回に一人四射と定め尺二の的を三つ並べ
 中央の的に中りたるを○(得点)とし左右の的に中り
 たるを●(減点)とす四射して勝負なし更に一射して
 清盛時代に達しぬ敗者の受くる罰は例によりて射場
 這ひなり新年早々這ひし者こそ御氣の毒の至りなれ

成績は次表の如し

源氏	5 4 3 2 1	大將藤原	●○○、
副將江副	○○○、○	副將吉川	○○○○○
坂田	○、、、○	高木	、、、
村田	、、、●	佐藤	、、、○
町野	、、、	岡本	、、、
橋川	、、、●	則元	、、、○
横山	●、、、	志田	、、、●

紅白の餅に舌鼓打つて散會せしは四時半近年にならぬ
 面白會なり云々

水泳部記事

明治四十四年度役員及部員等級如左

- 部長 野々口勝太郎
- 師範 加藤 貞雄
- 助手 川副 龍雄
- 委員 細川 隆志
- 初段 菰田 正則
- 一級 細川 隆志
- 青木 市郎
- 神原 政三郎

二級 石川 豊記 榊原政三郎 佐藤 清熊

高木 亮哉 江副 民也 赤司 寛一

三級 岩永 仁雄 岡本 糺 伊東 隆一

江口 勢太 古賀 廣治 木下 英夫

大高 誠 澤山 虎彦

佐野 四郎 福田 得志 高松 清

四級 原 隼人 鐘江 富次 中垣 實

德嶋 定雄

中村 德之

五級 里村 静一 篠田 重憲 坂田 敬之

橋本 喬 小笹 猗夫 吉原 政義

山領 季雄 野守 繁人 小柳 又一

大野虎太郎 倉岡 幸吉 本島 文一

進藤 伸治

級外 安藤 幹 後藤 太郎 熊谷 良介

池田 確二 下山 震一

七月一日―四日

唐津の有志家佐藤林賀氏の盡力で豫め交渉して置いた虹の松原海濱院借室の件、幸にも院主村崎氏の義侠的好意を以て交渉愈まじり、七月中は自

炊團を此所に設くる事を定めた、吾々學生にこの特等旅館の立派な座敷は少々結構過ぎて勿体ない位である、扱て愈々屋移りの段となつたが丁度一日午後炊夫長尾夫婦も來唐したので早速仕度に取いかつた、吾々は先づ水泳部代々の遺産たる茶碗、飯櫃、青土瓶、それから數代を經た様な枕、ゴザ等を荷車に満載して海濱院に引移つた、二日は未だ炊事道具不揃の爲め自炊は止して色々要用品を整理した、愈自炊を初めたのが三日、四日は雨になつた、然し雨天だからと云つて黙つて居るわけにも行かず一方唐津の有志家を訪問すると共に、警察に裸体游泳火藥使用の許可を得、又借舟の相談、脚立建設の相談等内外の多忙に到底も新家庭の夫婦位ではない、

松原の五月雨は中々さびしいものである旅館と云ふ旅館は七月の薄寒さに、まだ浴客は元より見ぬ、聞けるものは雨垂れの音と、濱に碎くる白浪の物すごい音ばかりである、借りたる室は二階の四十畳、炊夫等にはや片隅に休んでいる、机をならべて余念なく會計の計算をやつてゐた細川君

と余は明日の開場式はさうなるものかと心配しながら、あまりのさびしさに、ふかす煙草の煙の中に佐世姫の幽霊でも出そうだと語つた

七月五日

かねて大に心を碎いて居た借舟の件、幸青木市郎君の周旋で濱崎村の有志家、堤氏より二間一尺余の漁舟を借る事となつた、且又此舟は帆付のものでシェーリングの練習も出来る、誠に願つたり、かなつたりの次第である、午后一時開場式を開催す、來會者は佐藤氏を始め部員約十五名、可なり

の盛會である
本日入會者、青木 徳島 澤山 伊東 高松 原
吉原 大高 里村 石川

七月六日

午前一同濱崎に出かけ、約束の舟を借る、午後は水温猶低きにも係らず、久しぶりに腕試しをなすまだ十分ばかりにて頭痛を感じるは情なし、本日
加入者 江副、佐藤、岩永

七月七日

虹の松原の誇は正に朝夕の景色である、糺糊たる

灣内に曙光一度東山より來り照せば、島々は次第に淡く、波に流るゝ金線、海面すべり行く眞帆片帆、到底も須磨明石の比ではない、吾等は朝な夕な此雄大なる大自然の美に接して、ほしいまゝに身心を養つてゐる、蓋し夏日の樂此れに盡きると云つてもよからう

七高の卒業生加瀬光雄氏本日より我自炊團に入會し加藤師範來唐まで水府流教授の約成る、一全やゝ元氣つき水温低きにも係らず練習悍猛なり本日
加入者 加瀬 工藤

七月八日

夜加瀬菰田兩君の歓迎をかね、第一回茶話會を開く、來會者十八名

七月九日

開場以來練習最も盛んなり、一二重伸正略体、平泳、小拔手、片拔手一二重伸も先づ大体形もだけは出來かけたり、二級以上は重に大拔手、拔手伸、片手拔を練習す、

七月十日

午前豫定の通り一哩遠泳を行ひ僅に三名の落伍者

を以て成功し、午後練習隨意とす、
外國婦人來りし爲め兼ねて約束の如く四十疊の室
を明け渡し八疊の間四つに引移る、

夜三五相携へて唐津見物をなす、歸途は早や十一
時、濱に碎くる白波は月光に映じて銀箭の流るゝ
が如く、二里に近き濱邊月影を踏んで歸詠すれば
涼風一陣眞に吾等夏あるを忘る、

本日加入者 本島 鐘江 赤司 大野 中垣
七月十一日

脚立建設の交渉に多忙を極め、練習の監督思ふに
まかせず、小説 碁 トランプ等漸く部員の怠慢
を引き起す

七月十二日
加瀬氏歸京せられ本日より愈踏水術を菰田初段に
習ふ

七月十三日
百米突競泳をなす、審判青木、柳原、第一着、細
川、第二着、佐藤、大高、里村、鐘江、(全時)の
結果を得たり、

七月十四日

濱崎の祭に堤氏より一全招待を受け、夕方より濱
崎に行く、流石片田舎祭の事なれば奇想天外より
落つるが如き趣向多く、就中一同水着姿にて山を
引きたるは一生の記憶である、十二分の響應を受
け有難く感謝して宿舎に歸り付いたのは十二時、
本日加入者 岡本 江口

七月十五日

晴天大空に一点の雲も見ぬ、此れなる哉一同
は朝食を喫すると共に鏡山登山會を開く、午前十
時宿舎を發して爪先き上りに登りかゝつたのは十
時半、中腹で暫く憩い 頂上に達したのは十一時
一同布振松の下に休む、これは昔、松浦佐世姫が
袖を引掛けたものだ云ふ、口碑の是非はともあ
れ、中々に古色蒼然たる松樹である 瞰下すれば
白砂青松連つて四里、西盡くる所は舞鶴城、松浦
の清流近く麓を流れて城東にそゞぐ、遠く海洋を
眺むれば、高嶋 姫嶋の邊白波岸を洗ふて恰も島
てふ島は白の模裾をつけたるが如く、自然の美妙、
筆以て畫く可からず西風は頻りに吹き來りて綠蔭
の心地よき一同は早や恍惚となつた、聖所久しく

止まるべからずやがて踵を返して歸途についた

佐世姫の昔語るや青嵐

松風や佳人の袖の匂かな、

下りは上りよりも早く宿舎に歸つたのは一時、直

に碧波に身を躍らして玉なす汗を洗ひ去つた

本日登山者、徳島 大高 伊東 高松 佐藤 岩

永 鐘江 赤司 大野 中垣 江口 岡本 細川

榊原

七月十六日

加藤師範を迎ふ、部員の意氣大に昂る、

七月十七日

本日より愈々小堀流豫定の課程を練習す、午前は

足撃、早拔手、手繰の練習をなし、午後樽回五回

をなす、身体勞れて綿の如し

本日加入者 熊谷

七月十八日

午前樽回り三回、午後三哩の遠泳を行ふ、成功者

下の如し、細川 大高 大野 岩永 佐藤 鐘江

江口 中垣 伊東 高松 福田 夜師範歓迎會を

兼ね第二回茶話會を海濱院の離座敷に行ふ、來賓

佐藤氏をはじめ、自炊團外の部員集る者多く來會

者殆んど三十人、蓋し水泳部開催以來の盛會也、

七月十九日

午后師範都合の爲め練習隨意にす、一部の有志家

舟に帆して、濱崎の東岸に螺螄取りに行きしも獲

物なくして空しく歸る

七月廿一日

一隊廿有五名、大小二隻の漁舟を艤して高島に盛

大なる螺螄取り會を催す、浪高く海水濁り遂に獲

物なくして再び宿舎に歸る、

七月廿二日

東北風盛んなり朝海濱院裏に舟覆る、午後の引汐

に一同濱に出でアサリを拾ふ、獲る所三百余籠二

ツに餘る、

七月廿五日

水泳第一回試験を行ふ、進級者下の如し

一級 細川

二級 佐藤 榊原

三級 岩永 大高

四級 伊東 江口 鐘江 徳島 中垣 岡本

福田 原

五級 中村 野守 篠田 坂田

七月廿六日

久しく海濱院裏に建築中の脚立漸く竣工す、午后
総がかりにて海に下し盛んに飛ぶ、

七月卅日

本日例年の通り遊覧船の催しあるを以て加藤師範
鐘江 中垣 野守 坂田 伊東の六名は遊覧船に
乗られ残部は兼ねて案内せられし佐賀縣學生大會
に出席す、當日我水泳部を代表して専門學校撰手
唐津中學撰手と競漕して名譽の勝利を得たる端艇
撰手は下の如し

岩永 石川 佐藤 高木 江口 澤山 柳原

七月卅一日

明日より吾等は愈々住みなれしこの宿をすて唐
津中學の寄宿舎に移らざるべからず、こゝに第三
回茶話會を開き、歡を盡して十二時、名殘の一夜
に圓らかなる夢を結ばんと皆床につく、感慨又無
量 (八月以後の記事は次號に載)

雜報

左の諸先輩より龍南會宛年賀狀來る

侯野 義郎君	大野 源五郎君
行徳 俊則君	石田 和吉君
山下 均君	池田 秀雄君
杉村 徳治郎君	後藤 文雄君
寺田 剛君	大村 一藏君
齊藤 豊喜君	福留 卯一郎君
東仙太郎君	合屋 友五郎君
鴛淵 信雄君	石田 昇君
惠利 武君	